
暴走青春 マシンガン

叶井秦雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴走青春 マシンガン

【Nコード】

N5579F

【作者名】

叶井秦雨

【あらすじ】

ノンケでもバイでも、ましてゲイでもない高校生樋口飛鳥。そんな飛鳥の前に、飛鳥に一目惚れしたという超ド級の俺様二宮聖野が現れて……！？二人の恋愛模様を中心に怪人、ヤンデレ、根暗、いじめっ子、吸血鬼もどきが織り成す青春爆走ラブコメディ。

prologue・元・彼と彼らの日常

この日本っていうのは平和だなあ。と常々思う。

特に紛争もなければ日本国憲法が公布されてからは戦争とはほぼ無縁（とは言うが実際はどうなのか俺には分からない）。治安も良い方だと聞いたこともあるし（それが本当かは疑わしいのだけど）、事実今はとても平穏だ。

屋上から見上げる青空のなんと穏やかなことか。日本に生まれて良かった。

「燈縁君。今日のお弁当はどうだった？」

「最高。みほるちゃん愛してる。もういつでも嫁においで。」

視界の端にはほぼ一カ月ほど前漸く付き合いだした怪人と、それに見初められた大きいお友達が好きそうな容貌の少女とのラブコメが絶賛上映中だ。

こうやって怪人の注意が彼女に向けられたことに俺は心底ほっとしている。俺にはもう面倒見切れないね。彼女なら燈縁を難なく操縦できることだろう。

子育てが一段落した主婦とはこんな気持ちなのだろうか。ここに子離れの寂しさの表現を入れたら完璧母親なんだけど、如何せん俺は完璧母親ではないから子離れを寂しいと思う気持ちは微塵もない。逆に清々した。

「幸せだ。」

もうカレカノ宣言した彼らの間に俺は必要ない。燈縁に捕らわれない生活……………

うん。最高だね。

お前はツンデレか、と思った画面の前のお前。若しくはお前らかもしれないけど、お前は何もわかってない。

さつきから言ってる様に、燈縁は怪人だ。俺の記憶が確かなら、あいつは2、3回猛獣を締め上げている。更に教科書の内容覚えるために教科書を丸呑みしたこともある。本人はケロツとしていたし、何より本当に全部覚えた。

保健室で寝ていた（この時はまだ他人だった）みほるちゃんに添い寝したり、その他たくさんの常識離れの行動…。

ある意味で自分本位。つまり我儘なのだ。自分の思い通りにならなければ思い通りにさせるという強引さで、燈縁は本当に思い通りにさせる。だから怪人。

我儘な人間と付き合っただけなのは当然のこと、俺はすっかり疲弊してしまっただ。もともと無かった体重が更に減って増えなくなる程度には疲弊したのだ。責任とってもらいたい。

「というわけで俺の体格がヒョロイのは完全にお前のせいだからね？」

「え、それは遺伝じゃないの？俺様かんけーねーもん。」

…でっかい男がもんは正直気持ち悪いだろ。うん。ありえない。ついでに俺がやってもありえない。都ちゃんや古野坂さん位の可愛い系美少女じゃないと、ね。

と噂をすると、屋上の扉（鍵は勿論俺様怪人の燈縁に武力介入してもらった）の陰に都ちゃんの姿。彼女は明るい場所が苦手なのだ。

「…。」

おろおろとしている辺り、『入っていいのかな？』という感じで迷っているのだろう。俺の後輩である都ちゃんはいいい子だが人付き合い合いがとことん苦手なのだ。

「都ちゃん。」

「…先輩…！」

んー…あれは、笑ってるんだよね？喜んでる。表情が解りやすい燈縁とちがつて都ちゃんはとっても解りにくい。ちゃんと笑えば可愛いだろうに、損してる気がするよ。都ちゃん。

「…谷さん。こんにちは。」

「あ…古野…坂先輩…こん…ちは。」

因みに、古野坂さんは都ちゃんにコンプレックスを抱いているらしい。それは体型の…ね、女の子は複雑だ。

都ちゃんは燈縁のことを先輩だと思ってるんだから気にしないでいいだろうに。そういう訳にいかないのが元ヤンデレの古野坂さんなんだろう。彼女はその昔、恋人を刺したことがあるらしい。燈縁は古野坂さん一筋だから今はデレデレみただけど、俺以外の奴が燈縁に近づくと彼女を中心に気温がぐつと下がる。勿論天変地異でも何でもない。

「…すかー…！…飛鳥ー！」

「…ん？」

屋上の扉を勢いよく開けいきなり現れたのは比企村守基。涙目で登場だ。彼が涙目で登場する理由なんて只一つ、

「比企村つてば俺のことそんなに嫌い？」

「うん嫌い！」

「奇遇だね俺も。」

「俺様も。」

「ふえーん！飛鳥ーっ！」

濯宮楔が追いかけて来るからだ。

守基は弄られ体質で、俺も時折、燈縁と濯宮には毎回弄られている。燈縁ならば近寄らなければ万事問題なしなのだが、濯宮はそうはいかない。

濯宮は守基を弄るために学校に来ているようなものだから、探し出してでも弄りに来る。

で、守基は俺に懐いているため避難場所は必然的に俺となり、こんな感じになる。

あとは俺のその後の行動により3パターンに分かれる。守基が勝つか濯宮が勝つか燈縁が横からかつさらうか。

「樋口。その吸血鬼もどきこつちにちょうだいな。」

「いや飛鳥俺によこして、新・でこピン15連打の試し打ちに使うから。」

「飛鳥…っ！！」

吸血鬼もどきというのは、血が大好きな守基への揶揄いの愛称で、本人は立派な人間だ。ただちよつと血を舐めたくなる変態なだけで…つと、今はそんなこと考えている場合じゃないんだった。

「飛鳥あー…！」

俺の制服の裾をぎゅうつと握る守基、それを虎視眈々と狙う濯宮と兎に角でこピンがしたい燈縁。

そうそう、言い忘れてた。守基が勝つか濯宮が勝つか燈縁が横からかつさらうかの3パターンに分かれるって言ってたけど、大概是予鈴が鳴ってタイムアップ。つまり引き分けだ。

俺が決めかねているからじゃない。二人して来るのが遅いのだ。予

鈴の2分前じゃすぐに終わる。
そうして、今日も予鈴が鳴る。軽快な音楽が鳴り響く。

「あーあ。また引き分けか。つまんないのー。」

「あうあう…よかった…僕は今日も生還したよ…っ!」

「よし比企村、放課後だ。放課後教室で新・でこピン15連打の試し打ちやるぞ。」

「やだあああああああああ!…!!…!!…!!」

「ひ、燈縁くん…明日チャーハン作ってあげるから…ね?」

明日はどうなるのか、それは彼らの足の速さと明日の俺の機嫌のみぞ知る。

何はともあれ、今日のお弁当タイムは終了、各自片付けに入る。

次の時間はなんだったつけ?確か日本史だった気がする。

「飛鳥!明日は俺様の大好物チャーハンだって!」

「はいはいよかったねー。」

明日は明日でまた同じような感じなんだろうな、と他愛のないことを考えながら、俺は紙パックのいちごミルク豆乳カフェオレを飲み干した。

その翌日、俺の人生を大きく変える出会いがあることを、俺は知らない。

本編に入る前に登場人物紹介（前書き）

明らかに活用できない紹介ページ。

読まなくても本編に何ら影響はありません。無い様にしたいです。

本編に入る前に登場人物紹介

ヒグチアスカ
樋口飛鳥

誕生日：01/20（山羊座）

血液型：O型Rh-

身長：174cm

体重：59kg

家族：両親、兄

常識人。でも少し変わってる。独り言を呟くことがある。
人に興味を持ったことはない。怪人にはある。

曰く「恋愛はしない主義」で人を好きになったことは一度もない。
昔から辛辣で、クールと言えばクール。

容赦、同情、情けの三つは基本的に無い。

普通の容姿だと言っているが飛鳥の色気で撃破された生物は数知れず。

そんな生物には怪人が制裁を加えます。

怪人が側にいたもんだから告白した人は最早勇者。でも本人は容赦なく断る。

割と料理が上手で燈縁もみほるも絶賛している。

いちごミルク豆乳カフェオレを飲むなど好き嫌いはない。

特技はバトミントン。

ニノミヤセイノ
二宮聖野

誕生日：04/29（牡牛座）

血液型：B型

身長：185cm

体重：76・2kg

家族：両親

俺様気質。割と尊大。黙っていればかつこいい。

世界に平伏すなら俺に平伏せとか言い出したりする。

でも常識は持ち合わせている。

飛鳥が好みだったらしく思いきり告白したデングジャー及びチャレンジャーなお方。

要求に拒否権をくれないあたりもしっかり俺様。

飛鳥に関してのみ妄想像力がたくましい。

頭も運動神経も中の上。

人の話を聞く気は基本無い。なので飛鳥から見れば一番近寄りたくないタイプ。

幼いころから親の転勤であちこち転校を繰り返していたがようやく落ち着いた。

が家にはあまり思い出がないので偶に母方の祖母の家に頻繁に出入りしている。

祖母は既に亡くなっているが家族はみんな出入りしていることを知っているのでガス、電気、水道は通っている。

実は弓道を嗜む。

カナトヒエン

秦戸燈縁

誕生日：04/01（牡羊座）

血液型：B型

身長：186cm

体重：77kg

家族：母（別居）

怪人と言っても寸分違わない。やっぱり黙っていればかつこいい。やりたいことをやりたいように好きなだけ楽しむ。

みほるちゃんは俺の嫁。

飛鳥に手出したら殺っちゃうからな。

常識が通用しない。

みほる至上主義の変態。SでもいいけどみほるちゃんがSなら俺はMでもいいと本気で思ってる。

マシンガン所持。六法全書なんて彼の前では紙切れ同然。

決して馬鹿ではない。頭が足りないだけで。

誕生日的に人間として生まれたという事実が嘘くさい気もする（飛鳥談）

両利き。目も足も耳も両利き。

存命している家族は母親のみ。実は父親は刑事だった。

コノサカミホル

古野坂みほる

誕生日：11/11（蠍座）

血液型：O型

身長：154cm

体重：46kg

家族：両親、妹

大きなお友達が好きそうな容姿をしたおとなしい少女。

人を見る目があり空気が読めるいい子でもある。

逆にギャル4人の恐喝に対し喋るのすら馬鹿らしく思うなど肝っ玉の大きな所もある。

基本的に面倒見は良い。

実は料理が苦手。

出るところ出てないことがコンプレックス。

誰の手にも負えない燈縁を操縦できる1人。

その昔、好きな人を刺したり恋敵に毒を飲ませたり事故と見せかけて怪我をさせたり色々貶めたことも有る。所謂ヤンデレ気質。まだ誰も殺してない。

燈縁が他の女子と居ることがない（というか常人は近寄れない）ため今はそのなりを潜ませている。

飛鳥といるのは良いらしい。

当初お友達から始まった燈縁との関係だが7カ月を経て恋人同士になった。

ススミヤミンゲ
濯宮襖

誕生日：06/21（双子座）

血液型：AB型

身長：188cm

体重：77kg

家族：叔父夫婦、姉、弟

実は生徒会に所属しているいじめっ子。

ツンツンツンデレという難攻不落な男。

寧ろツンデレってレベルじゃない。鬼畜デレ。

でも好きな子には優しく接してしまう。調子出ない。

好みが天然だから悪意をとらえてもらえない。

特技はワープ早打ち。

甘い物が大の苦手でコーヒーでも砂糖が少しでも入っていると飲めない。

冷え性。温かいものが好き。

タニヤコ
谷都

誕生日：08/03（獅子座）

血液型：O型

身長：159cm

体重：50kg

家族：両親、弟

根暗で引っ込み思案。人づきあいが苦手で、まともに人の目を見て話せない。

ネガティブでなんでも悪い方へ考えが行く。

顔に自信がなく、髪の毛も前をがつり伸ばしていた。

そのせいでついたあだ名は『闇子』。本人も気にしている。

実は言う程顔は悪くない。磨けば光るタイプ。

飛鳥のものをはつきりと言うところに憧れている。

体型の割に胸があり、みほるのコンプレックスを刺激する。本人に

他意はない。

だって本人も体の割に大きい胸気にしてるし。

美術部所属。将来の夢は服飾デザイナー。それだけに裁縫は得意。

コーヒーが嫌い。

ヒキムラスキ
比企村守基

誕生日：08/07（獅子座）

血液型：A型

身長：176cm

体重：63kg

家族：姉、兄

弄られっ子。血を見ると舐めたくなる。楔の獲物。

飛鳥にめちゃくちや懐いている。飛鳥の血液の味が好みのため。前向きな性格。悪いことがあっても大体1分で立ち直る。

そこをことごとく崩される。

割とテンションが高いのかもしれない。

無駄に体が丈夫。3時間雨に打たれても問題ない。

ある意味耐久度はぴかいち。

三年前両親を一気に亡くし姉と兄とで暮らしている。

本人もバイトをいくつか掛け持ちしている。

SHOT 1・皐月晴れの日常崩壊

それは、昼休み開始直後の出来事だった。

「お前ちよつとこつちこい。」

「え」

手首ふん掴まえられ俺は引きずられていく。

見も知らぬ男。体型は…丁度燈縁と同じくらいだろうか。

「何。」

「黙ってついてこい。」

「ついてこいつて」

引つ張られてんだからついていかざるを得ないんじゃないか？

横暴だ。あまりに横暴。

こんな風に横暴な人間は初めてだ。勿論燈縁は怪人なので人間という枠には入れてない。入れてやるもんか。

「この辺でいいな。」

連れてこられた場所は体育館の裏手。ケバい戦隊ギャルナンジャーの巣窟だ。

彼女らは何時ものように原型を留めない程度の厚化粧をしていた。それ以上重ねてもしょうがないだろうに…。

「おい。てめえら邪魔だ。」

どっか行けと言わんばかりの威圧感。俺に向けられてないのに分か

る位のものだ。向けられた方は堪ったもんじゃないだろう。

それに俺は（というか燈縁が）、彼女らの住処を荒らしてしまったことがある。相当怖がらせてしまったらしくそれ以来廊下で鉢合わせしても顔を青くされ、目も合わせてもらえない。頭がイカレてるといふ噂も払拭出来ぬまま今に至るのだ。

と言うわけで男の後ろにいた俺に気がついた彼女らは、やはり顔を青くし、やばい樋口だとか小声で何かを囁き合いその場から足早に逃げ去っていった。

「へえ。お前あいつらに何かした訳？」

心底愉快そうに笑う男はよく見るととても整った顔立ちをしていた。すつと通った鼻筋に、少しだけ釣り上がったヘーゼル色の瞳。栗毛色の少しはね気味の髪。そんな綺麗な顔の男が目の前で笑っていて俺は…心底イラついた。

トキメク？そんなことはない。俺はゲイじゃないし。そこまで人に興味を持てない。

それに、幾ら顔が良いからって、中身が良くなきゃ話にならない。俺はこういう横暴なタイプの人間は苦手だ。

「さて、」

ひとしきり笑った後、男は俺を体育館の外壁に押しつける。肩に手を置いてそのまま押し付けたのだと思う。

かなり大きな音がしたが、誰も気がつかない。

当たり前だ。今は昼休み。体育館では何人かの生徒がバスケットやドッチボールに興じているのだ。その喧噪に比べれば、俺の重さの無い体がぶつかった程度の音など聞こえやしない。

「…なんだよ。」

「人気の無いところに来たんだ。解るよな？」

左手首を取られる。そして、口づけられた。

「手首へのキスは、欲望って意味なんだってよ。」

「へえ…。」

男はどうでもいい知識を俺に植え付ける。

しかもこのシチュエーションでその知識：俺は多分告白される。
今までに数回あったことだ。昼休みや放課後に人気の無い場所に呼び出され、告白を受ける。

しかし名前も教えていない同性に告白とは、この男面食いか？

「俺のになれよ。樋口。」

「断る。」

「なれ。」

「初対面の人間にいきなり告白するようなタラシ及び浮気癖予備軍の傍には居たくない。」

「初対面…？ああ、忘れてた。俺は二宮聖野。お前に一目惚れした。だから俺のになれ。」

…こいつ、話聞く気ないな。

仕方ない。ここはあの作戦で行こう。

「あのさ、俺お前みたいなの話もロクに聞けない低脳で我儘で横暴で変態な人格破綻者の恋人になんてなりたくないから、諦めてくれない？はつきり言って迷惑なんだけど。てかマジうざい。」

半分以上は本音で構成されている暴言を、なるべく感情が出る様にして言う。これは飽くまで丁重に何度もお断りしているにも拘らず

まだ食い下がってくる男共（告白してくるのは男だけでなく女もある。けど女には使わない事になっているから男だ。）を強制的に諦めさせる、最終手段の一步手前の手段だ。言ってしまうえば俺は口が悪いですよというセルフネガキャンである。

「…。」

流石に諦めてくれただろうか？立ち直れなくなるかもしれないけどそんなの俺の知ったことではない。俺は自分が大事なんだから。

「…お前。」

「何？」

「気に入った。」

「…えつと…は？」

何この人…。マゾ？マゾなのか？なじられるのが快感っていうあれ。

「嘔吐きは好きじゃないから。丁度いい。」

正直ここまで言うとは予想外だったな、と奴は言った。

まあ、俺も正直、少し頑張ったなと思ってる。初対面の人間をここまで罵ったのは生まれて2、3回あったかもしれない。

「いや、あのさ。何とも思わないわけ？俺今初対面のお前を思いつきり最低呼ばわりしたんだよ？幾ら本当でも嫌にならない？」

「今さり気無く酷い事言ったよな。大体合ってるから特には思わない。俺は低脳で我儘で横暴で変態な人格破綻者だ。」

自覚してんなら直せよ。とは敢えて言わなかった。

「て、んなことはどうだっていい。樋口。俺を好きになれ。」

「拒否権発動。」

「効かないな！」

「チートかよっ！」

ふと、こいつの扱いが燈縁を扱うときと同じようになってきている事に気がついた。

こいつは俺様度が強く、ある程度の常識を持ち合わせている燈縁。つまり何が言いたいか。こいつは燈縁そっくりだ。顔でなく中身が。物は違うけど根っこが同じなのだ。

違う色に同じ量の黒。

黒い赤と黒い緑。

だからといって俺の次の行動は変わらない。

「…痛っ」

「あ、わりいわりい。大丈夫…か…？」

あいつの手が俺の肩から離れた隙に、俺はポケットからホイッスルを取り出す。そして思いきり吹いた。（勿論その間、二宮は啞然呆然していた。）

「呼んだか？」

「お食事中悪いね。」

「比企村置いてきたし、チャーハンならもう食べ終わったから気にすんな。」

上から降ってきたのは燈縁だ。このホイッスルで何時でも何処でも呼び出し可能。どうやって聞いてどうやって来てるのか俺もわからない。

まあ、怪人だから気にしないけどね。

「んで、なんの用だ？」

「退かしてほしい者があって。」

これが最終手段だ。

あまり使いたくない（というか使えない）手なのだが、俺は腹が減っているのだ。さつさと終わらせたい。

それに、燈縁に似たこいつのことだ、多分平気だろう。多分。

「ふうん…あれ、ね。」

「そう、あれ。」

「あれって…俺？」

「うん。俺の目の前に居る茶髪のはねっ毛の男とも言っね。」

「素直に名前で呼べばいい」

パーンツと乾いた音がした。

明らかに銃刀法違反のマシンガンが火を吹いたらしい。

「そうか、あれか。あれ。あの、台所によく居る。」

「俺の存在は生命力バリ高の虫とタメか。」

「あはは！俺様にとってはそれ以下だ。」

「はは…。理由を訊いても良いか？」

「俺様はてめえが大嫌いだ。」

その言葉を皮きりに、2人は追いかけっこ(という名の生死をかけた鬼ごっこ)を開始した。二宮と燈縁の速さは互角で、銃声が鳴り響く中、二宮は必死に逃げていた。

…これで俺の平穩は保たれた。

「…空が、青いなあ…。」

空腹を思い出して校舎に戻る途中、空を仰ぎ見る。
再来週には体育祭が控えていた。

SHOT 2・体育祭前日（前書き）

一年以上も間を開けてしまい、申し訳ございませんでした。
待っていてくださった皆様方に、お詫び申し上げます。

SHOT 2・体育祭前日

先日の出会いから二日後、ホームルームの時間。

俺の目の前には暖かな陽射しで日干しされてる守基と、その隣の席でゲーム機をいじる燈縁がいた。勿論、二人とも話なぞ端から聞いていない。

この学校では“奏戸と話すときは樋口を間に入れろ”という標語がある。だから燈縁が何をしてても特に何も言わない。ほら、蜂の巣になるのは嫌だから。

一応言っておくが俺は殺人幫助した覚えはない。燈縁はまだそこまですていない。俺の見たところではという前提がつくけどね。

守基に関しては、なんなんだろう。みんな微笑ましく見ている。

多分あの顔は癒し系なんだろう。血を舐めたがる変わり者だけど。寝言で“舐めさせろ”って言うてるけど。

が、そんな微笑ましい守基をそのままにしておく訳にもいかず、壇上で書記をしていた男子に言われ、俺は守基を起こした。

今回のホームルームで決めているのは体育祭の出場種目だ。リレー、障害物競争、バレー、バスケット、バトミントンなどなど。高校の体育祭にしては異常なまでの種目数を、今日中に決めなければならぬ。

この学校の体育祭は二日かけて行われる。

一日目に徒競走やリレーなど、所謂運動会を行い、二日目にバレーやバスケットをやる。

運動会＋球技大会＝体育祭という図式だ。

「三割方決まったんだけど、守基は何に出るの？」

「ん、と。パン食い競争が良いな！」

「残念な事に衛生面と予算面から却下。」

その知識はどういう経路から入手したんだ？いまどきパン食い競争なんてやらないだろうに。

「ええ…残念。お昼代浮くかと思ったのに。」

「給料日前？」

「うん。当日は二人とも留守だし。」

守基の家計が苦しいのは周知の事実だ。新卒の兄と高卒の姉、守基のバイト代で守基の家は成り立っている。その状況でよくここまで明るく暮らしてるなと思う。それだけだ。可哀想とは思わない。自分の幸せは自分が決めればいいと思うから。

「そもそも、パンひとつで保つと思う？」

「あ…。」

なんだその『今気が付きました』的な顔は。

「足りないよ！どうしようっ！？」

「俺に聞くな。さっきも言ったけど、パン食い競争はないから。」

「そうだった！」

…見てるこっちが逆に冷静になる部類の慌て様。

完全に当てが外れたという状態なんだろう。守基は危機に対して暴走、後に自滅するタイプだ。

「わかった。分かったから、弁当作ってやるから。黙れ。」

「…飛鳥がデレた。」

「はあ？」

「俺様だって飛鳥に弁当作ってもらった事ないのに。飛鳥って可愛いもの好きなんだな。初めて知った。」

「俺の弁当つまみ食いを越した横取りをしていた奴が何を言うか。」

こいつはこの通り体格がいいからよく食べる。だから俺の弁当の七割は奴の腹の中に収まった。

俺が小食なため、でっかい弁当ひとつで丁度良かったが、俺が人並みに食う人間だったらどうするつもりだったんだ？古野坂さんが燈

縁の弁当を作るようになって俺の負担がどれだけ減ったことか。

その負担が古野坂さんに行ったということは古野坂さんが大変になるということだが、彼女はあれで相手に尽くすタイプだから、苦にはならないだろう。

料理はあまり得意ではないと聞いたとき最初はどうなるかと思ったけど…よく考えたらあれだけ彼女煩惱な燈縁だ。どんなに不味くても喜んで食べてしまうんだろう。

…あの時は、ゆで卵を電子レンジで作ろうとするから本気で焦ったなあ…。

「だいたい、お前は古野坂さんが弁当作ってくれるだろ？まだ喰う気なのか？」

「飛鳥！俺にも弁当作れ！」

「お前は隣のクラスだろうがっ！！」

勢い良く扉を開けた非常識男には取りあえず消しゴムを投げつけておき、燈縁に尋ねた。

「みほるちゃんと飛鳥は別腹だ。」

「別腹って体に良くないらしいね。」

「俺様みほるちゃんの為なら死ねる。」

「刺されても？」

「串刺しにされても。」

うん。これならどんな料理が出ても燈縁の奴は完食するだろう。それ程までに燈縁の彼女煩惱は素晴らしい。真似したくない。

「奏戸って愛に溢れてんのな。」

「そうか？なら分けてやるよ。」

ん？燈縁の奴が怪しい宣教師みたいなことを言ってる。

「殺し合いだな。」

「は、え、ちよっ、おまつ！」

殺気を感じたらしい二宮は逃げた。それはもう猛ダッシュで。

燈縁はそれを追った。それはもう猛禽類のような目で。

とりあえず、俺は十字を切った。そして、今度こそ二宮がくたばるように、心の底から神様をお願いしたのだった。

SHOT 3・戦線未だ動き無し

そして、体育祭当日。

天気は良い具合に晴れている。カンカン照りではない、晴れ半分曇り半分のハッキリしない天気だ。

「やっぱり体育は曇りに限るね。」

「俺は嫌だ。寒い。」

「あー…濯宮は寒いのが苦手だからね。」

寒がりな人間には些か酷かもしれないが、走ったら暖くなる筈だ。走ったら。

「濯宮は何に出るの?」

「俺?俺は生徒会云々の関係で、全員参加の種目にしか参加しないよ。」

「てことは…綱引きと棒倒しと騎馬戦、か。」

「そゆこと。」

濯宮は役員だから、忙しいんだろう。

何せ来年度生徒会会長、最有力候補だ。上からも下からも頼まれ事満載なんだと思う。濯宮は世渡り上手で外面は良いから。

「あーすかー！」

「あ…守基。」

「ねえねえ！今日のお弁当おかず何？気になって気になってしょうがなく…て…。」

「比企村！丁度いい所に！」

俺と話していた濯宮はにじりにじりと俺に近寄る。

正確に言つと、俺の後ろに隠れたまま固まっている守基に。

「俺今ね、すっごくイライラしてるの。」

「え？ええ？」

「なんか色々雑用押しつけられちゃってさ。不幸だと思わない？可哀想だと思わない？」

「う、ううん！全然…！」

「そこで、さ。比企村。」

「な…なんだよあ…！？」

「遊べ。」

「ひっ！ぴぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

守墓は何とも情けない悲鳴をあげて逃走していった。

その後を爽やかな笑顔で追いかけていく濯宮。

…これが濯宮流の“ストレス解消法”なのだろう。

お気に入りの玩具を使って遊ぶ子猫。そう言えば、どんなにサディスティックでも可愛く聞こえるんだから、言葉つてのは偉大だ。

「…所で都ちゃん。何か用？」

「あ、あの……えっと……」

いつの間にやら背後で体操服の裾を引いていた都ちゃんに用件を訊ねる。

正直、さっきまで気がつかなかった。

「これ…濯宮さんですよね…?」

おずおずと差し出されたものは……鍵だった。自転車の鍵。

「さっき走っていったとき落としたみたいで……」

「あー、なるほどね。濯宮の奴ポケットに入れっぱなしだったんだ…。」

「これ…無いと困りますよね？やっぱり…した…か…？」

…おおつと最後まで聞き取れないぞ？声が小さくて聞こえない。
多分「渡しに行った方がいいですよ？」的な事を言ってるんだと思うけど。

「…都ちゃん、あっちの本部の方まで届けに行ったら？」

「え…でも…」

「本人に直接は無理でも、本部なら濯宮も絶対に寄るだろうし」

「あ…そうですね…。はい、行ってきます」

都ちゃんはトテトテと本部の方へ向かう。

…しかし、何故だか都ちゃんの様子がおかしい。

都ちゃんは濯宮の事苦手だって言ってたのに、なんでまた急に渡そうなんて考えたんだろう。

……………まさか…まさかね。

後輩がリア充になりそうですなんてね。

…ああそれなんてフラグ？

「飛鳥ー、集合だぞ」

「今行くよ」

燈縁に呼ばれ、クラスの列に並ぼうと駆け寄る。
ふと燈縁が担いでるそれに気がついた。

「それ何？」

「後ろに居たる？気づかなかったのか？」

「…全然」

燈縁は数人の男を担いでいた。全員ピクリとも動かない。気絶してるらしい。

ていうか本当に気がつかなかった。こいつら誰？

「気いつけるよ。テンション上がると悪ノリする奴が増えっから」

「…あれとか？」

「飛鳥、二人三脚手伝え」

「あれは何時もだろ。二宮待てコルア」

「うわっ怪人だ逃げろー！」

「開会式終わるまでには戻りなね」

「おうよ」

「りょーかい」

二宮に言ったつもりはない。

…あーあ、俺もサボろうかな。開会式。

「樋口君、開会式始まるよ」

「あー…うん、分かった」

そうか、古ノ坂さんが一人になるのか。

それは、マズイよな。流石に。

…よし、腹くくって開会式出よう。そうしよう。

「燈縁君は？」

「おいかけっこ」

「…そう、おいかけっこ…」

……寒い。

ここだけ妙に気温が低い…。

あれ、だろうなあ……。最近二宮ばっか追いかけて回してるから……。二宮、食い物と背後と夜道には気をつける。

「開会式終わるまでには戻るから、ね？」

「…わかった」

燈縁、早く戻ってこいよ……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5579f/>

暴走青春 マシンガン

2010年11月2日11時34分発行